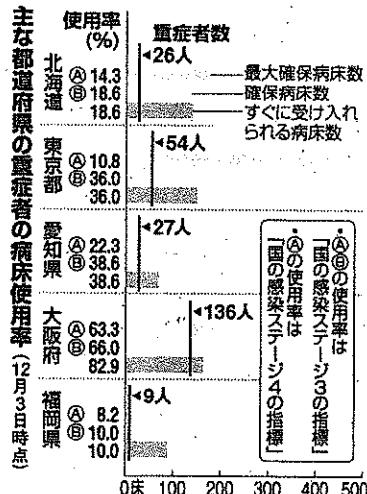


病床使用率 実態と違う?

考え方3通り 重症者異なる定義

国が新型コロナウイルスの感染ステージの指標にしている「病床使用率」について、「実態を表していない」との批判が出ている。病床の数え方は3通りあり、自治体によって認識にもばらつきがある。特に多くのスタッフが必要になる重症者は医療機関側の負担が大きい。病床の逼迫を伝えるには、実態に合ったデータを使うべきとの指摘もある。



主な都道府県の重症者の病床使用率(12月3日時点)

政府の分科会がまとめた感染状況の評価のための指標は六つあり、その一つが病床使用率だ。病床の数え方は二つ採用した。一つが「確保病床」。新型コロナの患者用に自治体と医療機関が調整している病床だが、現時点では入院している一般の患者を別の場所に移してから使うケースも想定し、数日以内に使えるものとみなされている。

もう一つは「確保想定病床(最大確保病床)」で、流行ピーク時に確保する計画上の病床数だ。

分科会が設定した感染急増段階のステージ3の指標は、確保病床使用率が25%以上、確保想定病床使用率が20%以上。緊急事態宣言の検討が求められるステージ4では、確保想定病床使用率が50%以上とする。ほかに、今すぐ使える病床を公表している自治体もあるが、政府は公表していない。